

# 南っ子通信

(副題 ニッコリース)

南小生徒指導だより

No.4 2022.6.2

## 赤ちゃんが泣いているそばで・・・



例えば自分の家で、下の子（赤ちゃん）が泣いているとき、そばにいた上の子（お兄ちゃん、あるいはお姉ちゃん）が「ママ抱っこして。」とかいって甘えてきたらどうしたらよいか…？少し前ですが、ある研修会（学校におけるカウンセリング関係）で出た話です。

結論から言うと、ひとまず赤ちゃんはそのままにしておいて（もちろん緊急の場合を除く）赤ちゃんよりも上の子の面倒をみてやるべきだ（抱きしめてあげるとか）ということでした。

親としては、というか人としてはどうしても小さな赤ちゃんに注意がいきがちですが、赤ちゃんはそのときのことは忘れてしまうけど、上の子はそこでかまってもらえなかった不満を忘れないで（引きずって）いるから、ということでした。また、そういうことが積み重なっていくと後々、いろいろな病理を生み出す要因にもなる、と語っていたのは、私の知っている埼玉医大の先生（確か臨床心理）でした。その先生は、子どもがたとえ10歳や12歳であっても「お母さん（お父さん）…。」などと甘えてきたら、ためらわずに抱きしめてやるとよい、と言っていました。

子どもたちも、学年が上がるにつれて行動範囲や交友関係が広がっていき、話す言葉も大人びたことを言うように（それも成長）なっていきます。でも心の中ではまだまだ親の庇護を求めているものです。

子どもたちの、親に対する不満（おこづかいが少ないなどのレベルでなく、もっと内面的、心情的なもの、例えばお子さんが帰ってきて、その日学校であった楽しかったことを目を輝かせて話しているのに、スマホの画面見ながら「フ～ン」なんて生返事してるんじゃないっての！～）のあるなしは、教室での彼ら、彼女らの表情や言動からもわかることがあります。あ、この子、おうちで何かあったな（あるな）とか…。

子どもは正直です。家庭でのストレス（この「ストレス」も多種多様）が学校で出て、周りの子をいじめたり、暴力的な言動をする子がみられることも少なくありません。もちろん、その逆の例もあります。実際、ある子が学校でいじわるをしなくなった時期と、おうちの人が意識してその子に声をかけるようになった時期とがほぼ同じだった、という過去の事例もあります。

以前担任した6年生のお母さんは、「先生、うちではこの子が学校から帰ってきたら、何も言わず、何も聞かず、1分間抱きしめるんです。そうすると娘も気持ちが落ち着くようなんですよ。」と話されていました。（中二の息子に、同じようにハグしようとしたら「なんだよ！」なんて言って、その場から逃げられた、と話す保護者の方もいましたが、それでもその子もたぶん心の中はまんざらでもなかったはず。男子なんてそんなもの。）

子育ては十人十色、百家庭百色、それぞれです。別の保護者の方は「先生、子育てって、ゴールの見えない、自分との戦いですね。」と…。その最中にはいろいろ悩みや葛藤はあると思います。私自身も子育て中、暗中模索の日々が続きました。（でも今思うと楽しかった。）



これも過去に受け持った子のお母さんが言われた言葉です。「先生、私はこの子が<sup>はたち</sup>二十歳になったとき、どんな人間になっているかで、自分たちの子育てが正しかったかどうか分かる、と思っているんですよ。」…けだし、名言です。